



「紅ほっぺ」を  
ご存じですか？

今回冬いちごとして育てているのは「紅ほっぺ」という品種。いちごは8月に植え、一定期間5℃以下にする必要があり、これを休眠と言います。現在比布町の主力品種である「けんたろう」であれば約1000時間必要です。一方「紅ほっぺ」は200時間ほどでよいので、秋の休眠で十分足り、冬に収穫することができます。写真のように、見た目は大きく長い果実が特徴的で、コクのある甘さが売りです。

棚に送る水や肥料の量・時間を設定し、自動的にチューブから投入。記録は回収し活用。



**実証実験成功に向け  
ハイテクと人の手と**  
このハウスでは、温度・水・肥料・二酸化炭素などの栽培環境がコンピューターによって設定されており、設定した内容が自動で管理される仕組みになっています。

こうした寒冷地でのいちごの栽培はまだ先例が少なく、ほとんどが手探りの実験的な試み。得られたデータは、今後の冬いちご生産拡大に生かされることとなります。このように、最先端の機材が導入されている施設ですが、いちご栽培を支えているのは何より人の力。9月の苗植えに始まり、日々の手入れや収穫など、必ず人の手が必要になります。一粒一粒大切に育てられた「冬いちご」。そこには、いちご作りに携わる人々の並々ならぬ思いがある。

### いちごで まちおこしを

一株一株確認し、不要な花芽を摘む。



るのです。

この冬いちごを作っているのは、農業生産法人ネクスピーク。ナナプラザなどを運営する、町内の若手農家が興した会社です。同社の北川代表は「1年を通していちごがとれば、衰退しつつある特産品のいちご栽培を復活でき、まちの力になる」と、この事業への熱い思いを語りました。全てが初めてで、安定した栽培には何年もかかるかもしれない中、様々な人・団体が「ワンチーム」となり挑戦しています。「冬いちご」。量に限りがありませんが、ナナプラザなど町内の店舗で購入可能です。皆さんも、食べて応援してみませんか？

冬いちごに挑むネクスピークの社員と町・農協の担当者



ぴっぷ町の挑戦は続く

# プロジェクト

PROJECT P  
Challengers

挑戦者たち

特集 — いちごの町復活を目指して「冬いちご」 —

「スキーといちごの町」比布町。そのいちご栽培の歴史は古く、大正10年頃から農家の自家用（子どものおやつ）として栽培が始まったと言われています。

販売目的のいちご栽培が増える中で、当時比布町産のいちごは「比布苺」という銘柄で親しまれていました。出荷用のいちご栽培が強化されるとともに、いちご狩りの拡大や、いちごを使った加工品の開発なども盛んに行われていました。

しかし、近年農家の高齢化や大規模化に伴い、稲作の繁忙期と重なる今のいちご栽培では難しくなってきたこともあり、町内のいちご栽培は減少が続いています。

そうした状況を打破すべく、農家や町、農協や農業試験場・道などで、いちごの町復活のためのプロジェクトチームを平成30年に結成。昨年の広報びっぷ7月号でとりあげた「ゆきさら」の試験栽培など、様々な取り組みを進めています。今回、新たな取り組みとして、真冬にいちごを栽培する「冬いちご」の実証実験栽培を開始しました。

### 新たないちご栽培を 目指して

比布町でこれまでに作られてきた春の出荷用いちごの場合、通常5月から6月頃にかけていちごの収穫が最盛期を迎えます。しかし、稲作がメインでいちご栽培を兼業として行っている農家の場合、田植え時期といちごの収穫が重なるため、いちご栽培は難しいという課題がありました。

そこで考え出されたのが、農閑期となる冬季のいちご栽培。12月下旬から雪解けの時期までの間に収穫を行うことで、稲作などの作業と重なることなくいちご作りができます。しかし、それは簡単なことではありませんでした。

### 最大の課題は 寒さとコスト

国道40号線、ナナプラザのすぐ裏に冬いちごのハウスがあります。真冬の比布町では、最低気温がマイナス20℃を下回ることもあり、いちご栽培にあたっては暖かい空間が必要不可欠です。しかし通常のハウスでは栽培に必要な温度

を確保するのに多くの燃料が必要となりコストがかさんでしまいます。

そこで、3重の特殊なビニールハウスを使い、室温低下を最小限に。昼間は20℃前後、夜間でも12℃以上に保たれています。

地温の変化を受けず、また管理や収穫が容易なように、いちごは高設栽培（地面より高い位置に組まれた棚で栽培する方法）で育てられています。

高設栽培は安定した栽培環境づくりに適している。



ハウスの外には暖房用のタンクが並ぶ。